マルクス物象化論の核心
――素材の思想家としてのマルクス――

佐々木 隆治
（一橋大学大学院・博士課程）

マルクスの物象化論についての先行研究は数多い。しかしながら、多くの場合、とりわけ「哲学・思想」の立場からなされる物象化論研究はそもそもの問題構成じたいを取り違えてきたのではないだろうか。典型的なのが廣松渉らの物象化論であるが、それを批判する論者も多かれ、少なかれ、この枠組みにとらわれてきたと言える。それにたいして、非常に重厚な蓄積を誇る「マルクス経済学」の立場からなされてきた物象化論研究においては、久留間鮫造らの先駆的な価値形態論・物神性論・貨幣論研究をつうじて、その基本的な論理が解明されてきたと言える。しかし、その場合、あくまで「マルクス経済学」の枠組みのなかでの問題の解明であり、物象化論の「実践的・批判的」意義が十全に明らかにされてきたとは言い難い。マルクスの理論的批判がたんなる「世界の解釈」にとどまらず、「世界の変革」のために為されたものであるかぎり、物象化論を理解するということは、その「実践的・批判的」意義を理解することでなければならない。

マルクスの物象化論は重層的であるが、その根本は『資本論』第一巻第一篇第一章第四節の「物神性」論において与えられている。しばしば誤解されているが、「物神性」論はなにも物神崇拝だけを扱っているのではない。むしろ、物神崇拝を生み出さざるを得ない商品の物神的性格とその秘密を明らかにすることが主題となっている。商品の物神的性格の秘密こそが物象化に他ならず、この物象化がなぜ生じるのかが論じられるのである。第一章第一節から第三節までの議論は、この物象化を先取り的に前提して論じられているのであり、第四節を理解することで第三節の価値形態論がもつ深い意味も明らかとなる。

価値形態論の直接的な課題は商品がもつ価値形態、すなわち価格の解明であるが、それだけではない。第一章は物象化を前提しており、しかも第二章の交換過程論で導入される人格的および素材的契機が捨象されているために、物象の世界、商品世界が描かれる。この物象の必然的な論理、物象化を前提する限り人間の意志や欲望と関わりなく成立する論理をマルクスは「商品語」と呼び、価値形態論において記述したのである。価値形態の展開は、「リンネルだけに通じする言語」にすぎなかった商品世界の言語が人間世界の言語を方言としてしまうようなコスモポリタン的言語（「商品の一般的言語」）へと生成する論理的過程である。物象化を前提するならば、諸個人にとっては無意識のうちに成立する、このような「商品語」の論理、価値形態こそが諸個人の恣意や行為を根底において規定しているのである。

とはいえ、マルクスが着目したのは人格や素材とは関わりのない無意識の形態的論理だけではない。逆である。むしろ、マルクスは無意識の形態的論理にもとづいて運動する物象によって編成される素材的世界こそを明らかにすることが目的であった。という

のも、物象化とそのもとでの疎外された労働を克服するための諸契機は、何よりもこの素材的世界の抵抗から生まれてくるのだからである。たとえば、マルクスが資本のもとへの労働の形態的包摂および実質的包摂において問題にしているのは、このような形態と素材の相克にほかならない。たしかに形態は素材を形態的にばかりでなく実質的に包摂することによって素材的世界を形態の論理に適合させようとする。にもかかわらず、そのことによって疎外された労働はいっそう過酷なものとなり、労働日延長への衝動はさらに強まり、人格および素材的論理との衝突は緩和されない。むしろ、そのことによって両者の相克はいっそう深刻なものとなる。素材の生産を目的とし、人格的関係を基礎とする共同体的生産とは異なり、価値増殖のために生産する資本主義的生産は人格および素材の論理からは乖離し、衝突せざるを得ない。

マルクスは多くの場合、形態についての思想家（関係主義、経済学）、あるいは素材的世界の一契機である人間についての思想家（疎外論）だと考えられてきた。しかし、マルクスの抜粋ノートをみるなら、素材の思想家であったことはあきらかである。疎外論は、マルクスが素材の思想家であったことの一側面を表現する思想であるに過ぎない。また経済学批判における形態への着目もつねに素材との連関で捉えられなければならない。マルクスは素材の論理を掴むためにこそ、形態の論理を掴んだのである。このように理解することによって、素材的論理に着目した晩年のマルクスの抜粋ノート（共同体論、農業化学など）の意味もまた明らかになると思われる。本報告では、物象化論（商品語、人格の物象化、物象の人格化）および所有論（近代的私的所有、本源的所有）を取り上げることによって、マルクスが素材の思想家であることを論じたい。